

---

# 瞳に君を映して

霧夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

瞳に君を映して

### 【Nコード】

N6443Q

### 【作者名】

霧 夢

### 【あらすじ】

今年はれて高校生になれた高町なのは  
なのは最初共学校に通う予定だった  
しかし

実際に通ったのは女子校でしかも金持ち学校だった

そんなことになったのも

フェイトの目惚れが原因だった

なのはは「J」の学校でやっていたらいいのか？

そっす

フヘイトとJの恋の行方は？

## 出会い

あの日は青空だった…

雲ひとつない快晴

私の新たな門出を祝ってくれているものだとおもっていた  
あの時までには

### 第1章 出会い N視点

母「なのはそろそろ起きなさい！！春休みももう終わるのよ。高校  
生らしくしてちょうだい！」

そんなお母さんの怒った声で起床するわたし  
高町なのは 今年から花の女子高生です！

N「うん…今起きる…」と春休み中はずっとこんな感じです  
我ながら酷い生活してる自覚はあります  
だって今もつお昼の12時が過ぎようとしている時刻ですそれでも今  
日は早いほうです！

だって  
あさってからはもう高校が始まっちゃうから初日から遅刻は絶対に  
いやなの

母「今日は高校で使うノートとか買いに行くんでしょ？」

N「あつ！そうだった。」

そういえばまだかってないんだった。

N「それじゃあ、今から買いに行ってくる」

母「はい、行ってらっしゃい」  
N「行ってきますー！」

空が赤く染まってきたころなのは海鳴臨海公園で家に帰りながら散歩を楽しんでいた

N「ノートは買ったし消しゴムとかも買った、後は入学式を待つだけだ」私は明日の入学式を楽しみにしながら海に沿ってあるいていた

ヒューヒューン！

そこに桜の花びらが春一番と共にやってきた！！

花びらが来たほうをみるとそこには夕暮れに映える金色の髪と美しい深紅の瞳を持った女の人が立っていた

(うわゝ綺麗！！金髪だ、外国人かな？)

私とその女の人に見とれているとそのことに気づいたのか女の方は私に近寄って来た

女「私の顔になにかついてるのかな？」

N「いつ いえ、そういうわけでは？」

(声かけられちゃったよ、どうしよなんだか顔が赤くなっちゃうの)女「そう？ならいいけど、そうだな名前、名前教えてよ」

(どうしよう可愛いなあ見た感じ私と同一年くらいかな？)

N「たっ 高町なのはです。あのあなたは？」

F「ああ私？私はフェイト・テストロツサ・H、フェイトって呼ん

でね！なのはちゃん！！」

N「はっ？はい！フェイトさん」

（名前よばれちゃった / / /）私の顔がどんどん赤くなっていくのがわかる

（どうしよ、こんなの初めてなの）

どうしたらいいかわからない私は取り合えずここを離れようと思っ  
た。そこで

N「あっ！！そろそろ時間だ。すみません私はこれで」

F「えっ？！ちよつと待って……ってもういないや。でも名前はわ  
かったから母さんのデータベースから捜せば誰だかわかるよね」

そういつてフェイトはなのはが走っていった方とは逆へと足を運んだ  
そのあしどりはとても軽やかだった

あなたにまた会いたくて（フェイト視点）

第2章　入学取り消し！？フェイトからの誘い　フェイト視点

私は家に帰って来てすぐにパソコンを立ち上げた  
そう公園であった高町なのはという女の子のことをしらべるため  
ある

F「おっ！あつた、なになに？」

そこには彼女の顔写真と家族構成それからこの学校に通うかがの  
つていた

（でもやつぱり可愛いな／＼／それに蒼い瞳も好きだな）

彼女はやはり私と同年だった

F「え」と入学予定の学校はと……えっ！？聖晶学園だっけ？  
たしかあそこは全国一偏差値の高い学校だったはず

私の入学予定の学校も全国屈指の頭のよさだが聖晶学園は群を抜い  
ていい

そんな学校に入学予定だったなんて

F「凄すぎ！でもなんとかしてみせる！！」

そうやって私が決意をしていると

ガチャ　　バタン

玄関があいた

（母さんもう帰ってきたのか……ちょうどいい母さんにあの子のこ  
と話して見よう）

F「リンディ母さんちょっと話があるんだけど」

リ「ん？いいわよ、いってみなさい」

私は今日あった彼女のこと話した……

リ「話はわかったわ、それでフェイトはどうしたいの？」

F「私…私はあの子と一緒に学校に行きたい」

リ「わかった、あとのことは私がなんとかしてみせるわ」

F「ありがとう、母さん！」

(入学式が楽しみだなあ!!)



## 入学取り消し！？そして再開（なのは視点）

わたしは家で一人ごろごろしていた

明日はいよいよ入学式だ

（いよいよ明日かあゝ緊張するなあゝ）

ピロロロンピロロロン

「あつ、電話だ！だれからだろ？」

「はい もしもし？」

『わたくし聖晶学園のものですが高町なのはさんでいらっしやいますか？』

「はい そうですけど」

（なんのようだろ？）

『大変申しあげにくいのですがあなたの内定が取り消しになりました』

「はい わかりました………つてえええー！！！」

（取り消し？！私は高校いけないの??）

『そこで高町さんには聖晶レベルの学力の学校ということで聖旺学園に通って頂くことになりました。制服など必要なものはこちらで送らせて頂きました。あと寮制なのでそちらの準備もしててください。それでは失礼いたします』

ガチャ

聖晶学園の人は要件が済むと同時に電話を切ってしまった！

「ど、どうしよ〜?!でも別の学校には通えるみたいなこともいつたとしても寮制だともいつたよ〜な…もうほんと どうしよ〜!?!」

ピーポーン

「は〜い」

「高町なのはさん宛てに小包です」

「ありがとうございます」

(なんだろ?)

さっそく開けてみるとそこには聖旺学園の制服とそこまでの地図がはいっていた(あれ?確か聖旺ってお金持ちの学校じゃなかったっけ?)

「はあ〜やっぱり現実なんだ…っていつまでも落ち込んでてもしかたがない、よしがんばるぞ!」

私はお母さんが仕事から帰ってきてから今日あったことを全部話した

母「そう…そんなことがあったの、わかったわ、寮生活は心配だけど頑張つてきなさいね?」

「うん!ありがとうございます」

時間が過ぎるのは早く今は入学式の最中(因みに学園が広すぎてか

なり迷ったのやっぱりお金持ちの学校でした)  
そろそろ入学生代表挨拶だ  
すると

キヤー！ キヤー！

フェイトさんかっこいいですわ！ フェイトさん！

(フェイトさん？どっかで聞いたよう??)

私がそんなことを考えてるうちにフェイトさんの話は終わっていた  
(ていより歓声で聞こえなかったの)

入学式が終わり自分の教室にいつてみると入口に人だかりが出来て  
いた「すみません、あの通してください」  
もみくちやにされながらなんとか教室の中に入れた私が顔をあげる  
とそこには

「この間の公園のひと!？」(えっ?どうしてあなたがここに?!)  
急にあつたからなのか私の顔は火傷しそうなほどに熱くなっていた  
「あつ!なのはちゃん、公園の人は酷いんじゃないかな?フェイト  
だよ、フェイト」  
フェイトさんは少しがっかりしたような感じでいつてきた

「すっ、すみません。フェイトさん」

「やだ!ゆるさない」

(どっしりフェイトさん怒ってるよ)

「私なんでもするのでゆるしてください!」

「なんでもきくの?」

と意地悪な笑みを浮かべてフェイトがきいてきた

「わ、わたしにできることなら」

「なら私のことをさんを付けてよばないこと私もなのはちゃんのことなのはって呼ぶからあとタメなんだから敬語は禁止いい？」

(そんなのでいいの?)

「へっ?」

私はもつとすごいこと要求してくると思ったからすっかり拍子抜けしてしまつてついまぬけな声をだしてしまつた

そこにフェイトニタリ顔で

「もしかしてなのはもつとすごいこと期待してた?例えば胸揉ませるとか?」

(フェイトさ…ちゃん私のことなのはってよんだ?ノノノ)

たつたそれだけのことなのに顔がさらに熱をもち耳まで真っ赤ださらに追い撃ちをかけたのがフェイトちゃんが最後にいつた胸揉ませろ!だ

(それより否定しないと)

「そ、そんなわけあるわけじゃないじゃないですかノノノフェイトさん」

「そうだよね、変態に汚染されてるな私、でもなのはがまだ私のことさん付けで呼ぶならほんとにするよ?」

フェイトさんは笑いながらいつてるけど顔は真剣そのものだ  
この顔は絶対やるって顔をしている

(はやく言わなきゃ)

「フェイトちゃ「おっ!!これは確かにいい胸やな、大きさはまあまあやけど形が最高や!」

(あれ?私胸もまれてる?名前は言おうとしたのになんで?てかこのもみかたはなんかやばい)

「うんっ あう あん!」

(やだー私みんなの前でこんなエロい声出してるだれか、助けて)ふと前をみるとさっきまでいたフェイトちゃんの姿がなかった

「ハヤテなにしてるのかな?」

いつもより数段低い声でフェイトちゃんが話しかけている 若干殺気を感じるのはきのせいかな?

「なにつてこのめっちゃかわいいこの子の胸はどないな感じか調べよおもてな…」ってフェイトちゃん

私の胸を揉んでた人はフェイトちゃんに話しかけられるとするやいなや私の胸から手をどけて冷や汗をかいて固まっていた

「うん、ハヤテあとで私の寮の部屋ね(ニコ)」

と笑いながらいうフェイトちゃんだけどフェイトちゃん目が笑っていないの

(ところで私の胸をもんでた人ってだれなんだろ?)

「あのフェイトちゃん?」

「ん?なに?なのは」

フェイトちゃんはいつもの笑顔にもどり私の方を向く顔が熱くなつて来ちゃったはやく話しを進めよ

「あの、こ、この人だれ?」と私の胸を揉んでいた人指をさしている

すると、フェイトちゃんが「変態」

とするどい一言を突き刺すけどそんなのまったくいにかいさないよ  
うな態度で

「フェイトちゃん、変態はひどーない？私にはちゃんと八神ハヤテ  
って名前がありおるんよ」

「ハヤテちゃん？」

「そつやよ。なのはちゃん！」

「なんで私の名前しってるんですか？」

私が不思議そうに聞くと

ハヤテちゃんは笑いながら「そんなかんやかん」

となんでしってるかははぐらかされてしまった

答えてくれそうなら二つ目の質問をすることにした

「フェイトちゃんとハヤテちゃんはどういう関係なの？」

という質問もハヤテちゃんが答えた

「私たちの関係かあ？そんなただの幼なじみやんなあフェイトちゃ  
ん」

フェイトちゃんもそれにはコクコクと頷いていた

「へえーなんだかいいですね、幼なじみって」

私が純粹にすごいと思っていたところに

ハヤテちゃんが

「だから私はフェイトちゃんの秘密をいっぱいしつとるんよ（ニ）」

と黒い笑みを浮かべていった

それにフェイトちゃんが

「ハヤテやっぱりなんか意地悪だよ？」

「当たり前やん、仕返しやもん」

とまあ入学初日からいろいろあったけどなんとかやっていけそうです！

陰の声

「なんなのあの女確か高町なのはとかいったかしらフェイト様にあんなにお近づきになって庶民のくせになんてずうずうしいこらしめてやりますわ」

なのはたちの知らないところでなのはがピンチになるうとしてい  
る……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6443q/>

---

瞳に君を映して

2011年9月17日13時01分発行